

『倫理コンサルテーション ハンドブック』

●編著／堂園俊彦

●著者／竹下 啓・神谷恵子・長尾式子・三浦靖彦

●定価 本体 3,500 円＋税 ●医歯薬出版刊 ●B5 判 144 頁

●ISBN978-4-263-73188-8



待望の書が出版された。倫理コンサルテーション(Ethics Consultation: EC)に関して包括的に記述された大変優れた本である。基礎から始まり、設置、ECの進め方、評価をまとめ、判例やガイドラインなど、さまざまな利用可能な資料等を掲載している。とくにありがたいのは、付録に規約、申請書や結果通知書に加え、実施記録のサンプルも加えられていることである。読者は、ECの実践に役立つ資料が1冊の本に収められ、大きな恩恵を受けることであろう。

私が1990年に米国で生命・医療倫理の勉強をしていたとき、2冊の本が臨床実践家の間で大変人気があった。それは、Jonsenらの『Clinical Ethics』(通称青本)と、John La Pumaの『Ethics Consultation: A Practical Guide』(通称赤本)であった。私は、判型も厚さもほぼ同じ、表紙の色だけ違う2冊をじっくり読み比べた。『Clinical Ethics』は症例分析の方法論が大変わかりやすく書かれていた。『Ethics Consultation』は当時何百例ものECを経験してきたJohn La Puma博士によるケース集であった。熟読の結果、当時の日本にはまずは症例分析の一つの方法を紹介することが先決と考え、『Clinical Ethics』を『臨床倫理学』(新興医学出版社刊)として訳出し、日本には四分表としてそれなりに定着した。La Puma博士によるケース集も大変素晴らしいが、米国の医療制度のなかで、米国の価値観でECがなされた例が主体であったので、少々日本の読者には難があると思い見送った。

そしてようやくECに特化した本が、堂園教授のリーダーシップのもと、日本で公刊された。私が期待することは、日本の文脈でのケースの蓄積である。本書の共同著者の長尾先生との共著論文(Nagao N et al. BMC Med Ethics 2008; 9: 2)で、同じ症例で日本と米国の倫理コンサルタントチームがどのような助言を与えるかを比較研究した論文がある。アルツハイマー病の末期患者の代諾者のシナリオであるが、米国チームは、法的代諾者(遠くにいる連絡のつかない息子)の意向を飽くことなく求めつづけたが、日本チームはそばに住む義理の娘を代諾者にするのに大きな問題点を感じなかった。

もう1点期待することは、例えば同じDNR指示でも、それを出す道徳的理由が異なることに文化差を見出すことができるだろうということである。ある者は、自己決定や経済的理由から決めるかもしれないが、別の者は、家族に心配をかけたくないから、という理由かもしれない。一見同じ判断でも裏に潜む倫理観の相違がある。本書を通じ、日本のECがそのような側面を明らかにしてくれることを期待したい。とにかく本書の発刊を心待ちにした者として、嬉しく思うと同時に大きな成果を期待したい。

(赤林 朗／東京大学大学院医学系研究科 公共健康医学専攻 医療倫理学分野)